常葉大学教育学部紀要〈論文〉
第41号　　2021.3.　　55頁～　71頁

晩唐期の詞華集『又玄集』（韋荘編）の詩律に関する研究序説

Introduction to research on poetic meter in the late Tang dynasty anthology "You xuan Ji" (edited by Wei Zhuang)

冨　山　敦　史
TOMIYAMA Atsushi

（令和二年十一月四日受理）

抄　録

本稿では、晩唐に韋荘によって編纂された詞華集である『又玄集』の詩律に関する研究について、その意義と目的を掲げ、具体的な研究方法と到達目標について述べた。具体的な方法として、『又玄集』のテキストをデータベース化し、それぞれの詩の平仄の具体を調べて近体詩の詩律（平仄式）と比較し、『又玄集』所収の詩の詩律の傾向と特徴を解明することを通じて、晩唐期に編纂された「唐人選唐詩」の一つである『又玄集』における詩律の特徴と採録された詩人の詩の傾向、編者韋荘の選詩基準等を明らかにし、晩唐期における『又玄集』の中国文学史上における新たな位置づけを目指すことを研究の序説として述べた。また、『又玄集』採録の詩僧の詩律を検討した結果、韋荘が採詩基準とした「清詞麗句」（律者既採，繁者是除）の典型を為すものであることがわかった。

キーワード　唐人選唐詩　又玄集　韋荘　清詞麗句　詩律

一．研究の意義と目的

本研究は、中国では明代に散逸し、日本に唯一現存する韋荘編『又玄集』（注1）のテキストをデータベース化し、収録される詩の平仄の具体（平仄式）を調べ、『又玄集』所収詩の詩律の傾向と特徴を解明し、晩唐期に編纂された「唐人選唐詩」の一つである『又玄集』における詩律の特徴と採録された詩人の詩の傾向、編者韋荘の選詩基準の実態を明らかにすることを目的とする。これまで詩律面での研究が進んでいなかった晩唐期における『又玄集』の中国文学史上における明確な位置づけ、とりわけ近体詩の詩律（規定の平仄式）との比較によって、杜甫を圧巻とする『又玄集』所収の詩人たちの詩律意識（どの程度平仄式を意識していたのか）と宋代以降盛んになっていく詞の先駆者としての韋荘の近体詩における詩律意識（どんな平仄式が編者としての選詩基準にかなうのか）の実態を具体的に解明することができる。また、これまで電子テキスト化がなかった『又玄集』のデータベース化は、文献の電子化が進む中国文学研究において、今後の詩律研究にあたえる影響は計り知れないと考えられる。

二．問題の所在および『又玄集』（韋荘編）について

晩唐の九〇〇（光化三）年に、韋荘によって編集された『又玄集』は、五律、七律、歌行など百五十人、約三百編の詩を採録している唐代詩人の詞華集、いわゆる「唐人選唐詩」（注2）のひとつである。『又玄集』のテキストは、明代の中国では既に失われていたので四庫にも納められず、唯一残るテキストは日本に伝わった官版本『又玄集』（享和三〈一八〇三〉年江戸昌平坂學問所刊有官版本）の和刻本『又玄集』のみである（注3）。

中国では、一九五八年に、この和刻本『又玄集』（夏承燾編、古典文學出版社、一九五八）が刊行された。その後『又玄集』のテキストを含む『唐人選唐詩（十種）』（上海古籍出版社 一九七八）、『唐人選唐詩新編』（傅璇琮編、陝西人民教育出版社 一九九六）、『唐人選唐詩新編（増訂本）』（傅璇琮・陳尚君・徐俊編、中華書局二〇一四）が刊行されるにおよび、徐々に「唐人選唐詩」の研究が進んでいく。しかし、『又玄集』については、「唐人選唐詩」の一種としての概論的書誌的な研究が多く、収録詩作品の構成や詩律の具体に関わる研究は進んでいない。

日本では一九三〇年代から「唐人選唐詩」の研究がすすめられてきた（注4）。しかし、『又玄集』の研究については、一九七〇年代に川北泰彦氏による「『又玄集』編纂時の韋荘」（川北泰彦、九州大学文学研究七二、一九七五）の論考が見られるが、その後の日本における『又玄集』や編者韋荘に関わる論考は、広瀬智氏の「韋荘「乞追賜李賀皇甫松等進士及第奏」―『又玄集』編纂意識論補説―」（奈良教育大学国文二五、二〇〇二）や論者の「韋荘編『又玄集』所収の杜詩七首」（奈良教育大学国文三九、二〇一六）にとどまっており、『又玄集』所収作品の詩律の特徴や傾向の具体的実態にまで踏み込んだ研究はいまだなされてはいない。

『又玄集』は、唐代の詞華集である「唐人選唐詩」中、唯一杜甫の詩（七首）を採録している。宋代以降、詩聖と讃えられる杜

甫であるが、同時代においては詞華集に採録されるほどの知名度の高さはなかったと考えられる。また、当時の詩の伝播、普及の状況、あるいは伝播、普及していたが、詞華集に採録すべき価値あるものとして杜甫の詩の評価がなされなかった等、杜詩が採録されなかった理由は様々に推測されるが定説はない（注5）。『又玄集』採録の杜詩七首は、集の圧巻に配せられるが、その詩体は、五言律詩が五首（「春望」「西郊」「遣興」「山寺」「禹廟」）、七言律詩が二首（「南鄰」「送韓十四東歸觀省」）で、いずれも詩律（いわゆる近体詩の平仄の原則に合致するか否か）の観点から分析すると、近体詩の規定通りの模範的な作品である。杜甫は、近体詩（特に五律・七律）の完成者として高く評価されているが、なぜ『又玄集』のみが杜甫を採録し、その他の詞華集は採録しなかったのか。

『又玄集』の編者韋莊は序文で、選詩基準は「清詞麗句」であると述べる。これは杜甫が自らの詩論を表明したとされる「戲爲六絶句　其五」中にある言葉である。選詩基準が「清詞麗句」なら、採録された杜詩七首はいかなる詩の特徴を持ち、いかなる詩律を持っているのか。また他の詩人の採録作品はどうなのだろうか。さらに、杜甫は最晩年期に規定の平仄式、詩律に従う律詩（正格）を破る律詩（破格・拗体律詩）を数多く作っている。唐末から宋代にわたって変化していく杜甫の詩の評価は、この最晩年期に作られた破格の律詩の存在によってどのような影響を受けていったのか。これらの疑問に答える第一歩として、唐代末に編纂された『又玄集』収録作品の詩律の具体を明らかにする必要があると確信し、本研究の着想に至った。

では、『又玄集』採録の杜甫以外の詩人の作品も、杜甫同様に平仄の規定に従った模範的な詩律を有しているのであろうか。また、『又玄集』には、今日では著名な唐代詩人の作品が採録されていると同時に、下巻には、僧や女流詩人など、今日では無名な詩人の作品も採録されている（表1）。

表　1

「上巻」のおもな詩人	「中巻」のおもな詩人	「下巻」のおもな詩人
杜甫、李白、王維、常建、王昌齢、李賀、高適、錢起、宋之問、孟浩然、孟雲卿、蘇廣文	杜牧、温庭筠、賈島、張籍、姚合、元稹、韓愈、劉禹錫、白居易、韋應物、李商隱、顧況	馬戴、杜荀鶴、僧（皎然　他11名）、女流詩人（李季蘭、薛濤、魚玄機　他19名）

ここに挙げた今日では著名な詩人の作品の傾向や特徴の系統性

や類型化を試みる研究は進んでいるが、『又玄集』の序文で「清詞麗句」を編纂方針と表明した編者韋莊はどのような意図でこれらの詩を採録したのであろうか。

また、波線を付した孟雲卿、蘇廣文は、杜甫と関係の深い詩人（注6）で、当時、尚古を旨とする元結（古詩のみ二四首で構成される『篋中集』の編者）とも親しい関係にあった詩人である。彼らの作品の詩律は、元結ら同時代の古詩の詩律とどのような繋がりをもっているのだろうか。

さらに僧侶や女流詩人の採録については、他の「唐人選唐詩」においては、『極玄集』（姚合編）の「僧侶」、『瑶池新詠集』（蔡省風編）の「女流詩人のみ」、『才調集』（韋縠編）の「僧侶と女流詩人」の例が挙げられる（注7）。これらの詩集に採録された詩と『又玄集』所収の詩を比較することで、晩唐期における僧侶や女流詩人がいかなる詩律で詩作したのか、当時の僧侶や女流詩人の詩律意識や傾向が把握できるとともに、後世、宋代の詩律意識（詩作意識）や詩論構築への系統性を考える鍵となるであろう。

以上、『又玄集』の詩律について研究することは、晩唐期における『又玄集』の中国文学史上における位置づけを明確にするとともに、編者の韋莊自身が詞の名手であったこと（注8）とも相俟って、宋代以降の近体詩や詞の韻律、戯曲における詞牌の研究に新しい地平を切り拓く端緒となるものと考えられる。

三．先行研究の検討

これまでの「唐人選唐詩」についての研究は、中澤希男（一九五一、一九七三）が、詩論の違う文学的集団（文壇）が文学的主張を行うために詞華集を編纂した可能性を示唆し、近藤光男氏が「四庫全書総目提要　唐詩集の研究」（一九八四）で「唐人選唐詩」の序文の書誌情報を示した。また、京都大学の唐詩研究会が「唐代の詩人」（一九七五）、中国文学研究室が「唐代の文論」（二〇〇八）を出版し、「唐人選唐詩」に採録される詩人の「伝記」や詩集の「序文」（『國秀集』『河岳英霊集』『篋中集』）の訳注等が発表された。また、東山之會（京都女子大学愛甲弘志氏代表）では、『御覧詩』の訳注（未刊行）、「唐人選唐詩研究会」（奈良教育大学漢文学研究室　川北泰彦氏代表、論者も参加）では、『篋中集』『河岳英霊集』『國秀集』『中興間氣集』『丹陽集』『又玄集』の序文や伝記、扁額について研究がなされてきた。しかし、『又玄集』所収詩の詩律（平仄式の具体）や詩律意識、詳細な註釈や読解について具体的に踏み込んだ研究はいまだおこなわれてはいない。

唐詩の詩律に関する研究は、これまでも王力（一九五八）、松尾善弘（一九九三）、古川末喜（二〇〇三）、丸井憲（二〇一三）らの、詩の平仄式や詩律、拗句、拗体律詩についての研究（注9）はあるが、詞華集としての「唐人選唐詩」の詩律に関わる詳細な研究はおこなわれていない。

中国における『又玄集』の研究は、一九五八年に刊行された和刻版『又玄集』から本格的に始まった。中国では『唐人選唐詩（十種）』（上海古籍出版社、一九七八）、『唐人選唐詩新編』（傅璇琮編、陝西人民教育出版社、一九九六）、『唐人選唐詩新編（増訂本）』（傅璇琮・陳尚君・徐俊編、中華書局、二〇一四）等の出版により、活字テキストとしての『又玄集』が提供されたが、『又玄集』に関する研究は、博士論文等で散見される状況である。

日本における『又玄集』研究としては、中澤希男（一九七三）が「唐人選唐詩考」（群馬大学教育学部紀要（人文科学編）一）で『又玄集』の書誌学的紹介を行い、次いで、川北泰彦（一九七五）が「『又玄集』編纂時における韋莊」（九州大学文学研究七二）で、編者韋莊の経歴と編集姿勢について文学論的立場から整理をしている。

その後の研究としては、広瀬智（二〇〇二）「韋莊「乞追賜李賀皇甫松等進士及第奏—『又玄集』編纂意識論補説—」（奈良教育大学国文二五）、論者（二〇一六）による「韋莊編『又玄集』所収の杜詩七首」（奈良教育大学国文三九）が見られるが、以後日本で『又玄集』採録の詩や詩律についての総合的な研究は進展していない。以上のことから、本研究は、国内外を通して初めての本格的な『又玄集』に関する総合的な研究の基盤となることが見込まれる。

四．研究の方法と到達目標

本研究では、『又玄集』本文を電子テキスト化して、検索可能なデータベースを作成するとともに、平仄式を付した本文の電子データを作成することにより、今後の詩律の比較研究に資する資料を提供でき、電子データを活用した『又玄集』の総合的な分析を行うための研究基盤の構築を目指したい。また、このことにより、『又玄集』のみならず、唐代の詞華集である「唐人選唐詩」の詩論や詩律の研究のとば口を開き、晩唐期における詩律の状況を解明できる可能性が見込まれる。また本研究により、宋代以降の近体詩や詞の詩律研究の発展や韻律研究の新展開に大いに寄与できると見込まれる。

本研究では、次のの①～④の実現を目指す。

①『又玄集』の電子化（電子テキスト本文とデータベースの作成）

電子テキストの底本は、唯一現存する和刻本『又玄集』とし、下記の参考文献を適宜参照し、本文の校訂・校勘を実施する。完成した電子テキスト、データベースの公開。

【底本】

・『又玄集』江戸昌平坂學問所刊有官版本、享和三〈一八〇三〉年、夏承壽編、古典文學出版社、一九五八

【参考文献】

・『唐人選唐詩新編（増訂本）』傅璇琮・陳尚君・徐俊編、中華書局、二〇一四
・『唐人選唐詩（十種）』上海古籍出版社、一九七八
・『和刻本漢詩集成総集（2）』長澤規矩也編、汲古書院、一九八二
・『唐人選唐詩新編』傅璇琮編、陝西人民教育出版社、一九九六

②『又玄集』研究の足跡の整理（中国・台湾・日本・その他）

『又玄集』の先行研究を整理分析し、その成果と課題・問題点を明らかにする。

③『又玄集』所収の詩の詩律の解明

『又玄集』所収の詩作品の平仄および平仄式を検討し、作品の詩律の特徴と歌われた内容（詩人の背景、平仄、語釈、註、訓読文、通釈の作成）を明らかにするとともに、選者である韋莊の選詩基準を具体化する。

④『又玄集』の唐代文学史上における位置づけ

『又玄集』に採録された詩人たちの作品を詩律の観点から他の「唐人選唐詩」の作品および宋代初期の詩作品と比較し、『又玄集』所収の作品の唐代文学史上における位置づけを明らかにする。

五．『又玄集』序文の検討

ここで『又玄集』の序文（全文と現代語訳）を掲げ、編者韋莊の編纂の意図を改めて確認しておく。

1 **謝玄暉文集盈編，止誦澄江之句。**
謝玄暉が文集編に盈つるも、止だ澄江の句を誦するのみ。

2 **曹子建詩名冠古，惟吟清夜之篇。**
曹子建が詩名古に冠たるも、唯だ清夜の篇を吟ずるのみ。

3 **是知、美稼千箱，両歧爰少。**
是に知る、美稼千箱なるも、兩岐爰に少く、

4 **繁絃九變，大濩殊稀。**
繁絃九變するも、大濩殊に稀なり、

5 **入華林而珠樹非多，**
華林に入るも、珠樹多きに非ず、

6 **閲衆籟而紫簫惟一。**
衆籟を閲するも、紫簫惟だ一なるのみを。

7 **所以、擷芳林下，拾翠岩邊。**
所以に、芳を林下に擷（はさ）み、翠を岩邊に拾ひ、

8 **沙之汰之，始辨辟寒之寶。**
之を沙し之を汰して、始めて辟寒の寶を辨じ、

9 **載雕載琢，方成瑚璉之珍。**
載ち彫し載ち琢して、方に瑚璉の珍と成るなり。

10 **故知、頷下采珠，難求十斛。**
故に知る、頷下に珠を採るも、十斛を求むること難く、

11 **管中窺豹，但取一斑。**
管中に豹を窺ふも、但だ一斑を取るのみを。

12 **自國朝大手名人，以至今之作者，**
國朝の大手名人自り、以て今之作者に至るまで、

13 **或百篇之内，時記一章。**
或は百篇の内、時に一章を記し、

14 **或全集之中，唯徵數首。**
或は全集の中、唯だ數首を徵すのみ。

15 **但掇其清詞麗句，録在西齋，**
但だ其の清詞麗句を掇ひて、録して西齋に在り、

16 **莫窮其巨脈洪瀾，任歸東海。**
其の巨脈洪瀾に窮まること莫く、東海に歸するに任すのみ。

17 **總其記得者，才子一百五十人，**
總て其の記し得たるは、才子一百五十人。

18 **誦得者，名詩三百首。**
誦み得たるは、名詩三百首。

19 **長樂暇日，陋巷窮時，**
長樂の暇日、陋巷の窮時に、

20 **聊撼膝以書紳，匪攢心而就簡。**
聊か膝を撼して以て紳に書し、心を攢めて簡に就くるに匪ず。

21 **此蓋詩中鼓吹，名下笙簧。**
此れ蓋し詩中の鼓吹、名下の笙簧ならむ。

22 **撃鳧氏之鐘，霜清日觀。**
鳧氏の鐘を撃てば、霜は日觀に清く、

23 **淬雷公之劍，影動星津。**
雷公の劍を淬げば、影は星津に動く。

24 **雲間分合璧之光，海上運摩天之翅。**
雲間に合璧之光を分ち、海上に摩天之翅を運らし、

25 **奪造化而雲雷噴涌，**
造化を奪ひて雲雷を噴涌せしめ、

26 **役鬼神而風雨奔馳。**
鬼神を役して風雨を奔馳せしむ。

27 **但思其食馬留肝，徒云染指。**
但だ其の馬を食ひて肝を留めむと思ひ、
徒に指を染むると云わむや、

28 **豈慮其烹魚去乙，或致傷鱗。**
豈に其の魚を烹て乙を去らむと慮り、
或は鱗を傷つくるを致さむや。

29 **自慙乎鼹腹易盈，非嗜其熊蹯獨美。**
自ら鼹腹の盈ち易きを慙ぢ、
其の熊蹯の獨り美きを嗜むのみに非ず。

30 **然而律者既採，繁者是除。**
然れば則ち律は既に採り、繁は是れ除けり。

31 **何知黑白之鵝，强識淄澠之水。**
何ぞ黒白の鵝を知りて、
強ひて淄澠（しはん）の水を識らむや。

32 **左太沖十年三賦，未必無瑕。**
左太沖十年にして三たび賦するも、
未だ必ずしも瑕無きにあらず。

33 **劉穆之一日百函，焉能尽麗。**
劉穆之一日にして百函つくるも、
焉ぞ能く麗を盡さむ。

34 **是知、班、張、屈、宋，亦有蕪辭。**
是に知る、班（固）、張（衡）、屈（原）、宋（玉）も、
亦た蕪辭有り、

35 **沈、謝、應、劉，猶多累句。**
沈（約）、謝（霊運）、應（瑒）、劉（禎）も、
猶ほ累句多きがごときを。

36 **雖遺妍可惜，而備載斯難。**
遺妍惜む可しと雖も、備載すること斯に難し。

37 **亦由執斧伐山，止求嘉木。**
亦た由りて斧を執りて山に伐るは、止だ嘉木を求め、

38 **挈瓶赴海，但汲甘泉。**
瓶を挈へて海に赴くは、但だ甘泉を汲む。

39 **等同於風月烟花，各是其櫨梨橘柚。**
等しく風月烟花を同じくし、
各々其の櫨（さ）梨橘柚を是とす。

40 **昔姚合撰極元集一卷，**
昔姚合「極玄集」一巻を撰し、

41 **傳於當代，已盡精微。**

當代に傳へて、已に精微を盡すも、

42 **今更採其玄者，勒成又玄集三卷。**

今更に其の玄なる者を採りて「又玄集」三巻を勒成す。

43 **記方流而目眩，閲麗水而神疲。**

方流を記して目眩み、麗水を閲して神疲る。

44 **魚兔雖存，筌蹄是棄。**

魚兎存すと雖も、筌蹄是に棄つ。

45 **所以、金盤飲露，唯採沆瀣之精。**

金盤の飲露、唯だ沆瀣の精を採り、

46 **花界食珍，但饗醍醐之味。**

花界の食珍、但だ醍醐の味を饗する所以なり。

47 **非獨資於短見，亦可貽於後昆。**

獨だ短見に資するのみに非ず。亦た後昆に貽る可し。

48 **採實去華，俟諸來者。**

實を採り華を去り、諸に來者を俟つ。

49 **時光化三年七月日。**

時に光化三年七月日。

【現代語訳】 謝玄暉（謝朓　四六四～四九九　六朝斉の人）の文集に詩文が満ちているといっても、人々はただ「澄江の句」（餘霞散成綺、澄江靜如練「晩登三山還望京邑詩」）だけを誦え、曹子建（曹植　一九二～二三二　魏武帝曹操の第三子「洛神賦」）の詩名が古から冠たりといっても、世の人びとは、唯一「静夜の篇」（清夜遊西園、飛蓋相追随「公燕詩」）を吟ずるのみである。

ここに（本当に素晴らしい詩を得ることは）、穀物の良い実りが千箱あっても、特別に優れた穂は少なく、琴などの楽器を激しく掻き鳴らし九回変調しても、「大護」（殷の湯王の樂）に並ぶほどの音色は滅多に得られない、また美しく茂った林に入っても、「珠樹」（珠を鏤めた仙木の一種）は多くなく、多くの竹林を調べ尽くしても、「紫簫」（紫色の美しい簫の笛）となるべきものを一本しか得られぬことに匹敵するほど困難なことであることを知るのである。

ここに、香の良い花を林の下でつみとり、翠を岩辺で拾い、それを水中で洗い分け悪いものを取り去り辟寒の宝とするように、またこれを彫っては削りして初めて瑚璉の珍とするように、苦心して吟味して初めて真に素晴らしい詩が完成する所以である。

よって、私は、たとえ驪龍の頷の下の珠を採っても、十斛も求める事は難しく、管の中から豹を窺い見て（見聞の甚だ狭いことの喩）も、ただ一つの斑を得るのみであることを知ったのである。

私は、（この集を編むに当たり）我が唐王朝の大手名人と呼ばれている人々から、今の作者に至るまでの詩をみたが、ある者は百篇の内で、時には一章を記し、ある者は全集の中でもわずか数首を記載するのみであった。

ただただ清詞麗句を採って西齋にて記録し、時代の大きな流れや大波（従来の詩人の名声や流派）に惑わされること無く、ただ東海に帰すのに任せるのみであった。

そうして総て記したものは、才子百五十人、詠み記した詩は名詩三百首にのぼる。

長く楽しい暇日にも、巷が困窮しているときにも、聊か膝を揺り動かして忘れないように帯に書き留めたもので、意識を集中さ

せて竹簡に書き留めた訳ではない。

（このようにして記したこの詩集は）詩の中の鼓吹であり、天下に評判の笙簧と呼べるものである。

その素晴らしさは、鳧氏（『周禮』で音楽を司り、鐘を鳴らす匠とされている）が鐘を打ちならせば、霜は日観の峯まで清く、また雷公が剣を淬げば、その剣の影は夜空に動き、また雲間の太陽と月が合わさった光すら両断し、海上には天にも連なる翼を蔓延し、天地をも奪って雲雷を吹き出させ、鬼神をして風雨を降らさせるほどである。

（一人で詩を撰ぶにあたって）、どうして、ただ、馬を食らってその肝を体に留めようとして、徒に血で指を染めたり、魚を煮てその腸を取り去ろうと思ったり、或いは鱗を傷つけるような真似が出来ようか。

私は、自らが鼴腹（『荘子』「逍遥遊」に出てくるもぐらもちの腸）のように、満ち足りやすい卑小な存在である事を恥じており、極めて美味な熊の掌を一人で楽しむように、利己的な目的で編纂した訳ではないのである。

よって撰詩する際に、律の整っているものを採り、煩雑で徒に華やかなものは除いた。

どのようにして鵝が黒いか白いかを判断して、易牙のように淄水と澠水の区別を付ける事が出来るだろうか、それは非常に困難なことである。

左太沖（左思二五〇?～三〇五? 西晋の文人）は十年かかって「三都賦」を完成させたが、（その賦に）必ずしも欠点が無い訳ではない。劉穆之（南朝宋の人）は一日に百函もの文章をしたためたが、どうして麗句を書き尽くしたと言えようか。

ここに、班固（三二～九二 後漢の文人「両都賦」、史家「漢書」）・張衡（七八～一三九 後漢の文人「両京賦」「四愁詩」）・屈原（屈平 前三四三～前二八三 戦国時代末 楚の人「楚辞」）・宋玉（前二九〇?～前二二三? 屈原の門下「九辨」）といっても蕪雑な詩が有ることを知り、沈約（四四一～五一三 梁の文人「四声譜」）・謝霊運（三八五～四三三 南朝宋の文人）・應瑒（建安の七子の一人）・劉楨（?～二一七 三国魏の文人 曹操に仕えた 建安七子の一人）といってもつまらない詩文が有ったことを知るのである。

美しい作品を取り落とさないようにすべきではあるが、総てを載せる事は非常に難しい。

斧を取って山に伐りに行き、嘉木だけを求め、瓶を携えて海に赴いて、甘泉だけを汲み、そして風月煙花を同等にして、樝梨橘柚をそれぞれ是とした。

昔、姚合（生没年不詳 唐文宗の八二七～八三五中に在世。元和十一（八一六）年の進士）は『極玄集』一巻（唐の姚合編 王維から戴叔倫にいたる二一人、百首を集めた詩集、詩人小伝を付している）を編纂したが、それは当代に広く伝わり、精微を尽くしたものであるが、今、私は、より玄なるものを選び抜いて『又玄集』三巻を版木に刻みなした。

そして、直角に折れ曲がる（玉が有るという）流れを記しては目が眩み、（金を産出するという）麗水を見て、神経がすり減ってしまった。

まだ取り残した兔や魚が残っているといっても、それらを獲る罠である筌も蹄も捨ててしまった。

それは、黄金の盤で露を飲む時に、（最上のものである）沆瀣の精のみを採り、仏寺で珍しい物を食べる時にも、（最上至極の）醍醐の味を饗するという目的であったからである。

ただ短見により自分のために、書き残そうとしたのではなく、後世に伝えようとしたのである。実をとり、華を捨て去り、ここに来者を待つ次第である。

時に光化三年（九〇〇）七月日。

まず、冒頭に謝玄暉と曹子健を掲げ、文名は伝わっていても具体的な作品は僅かしか世間の人々の口にはのぼらないことを指摘し、本当に素晴らしい詩作品を得ることは苦心し吟味して初めて完成するのだと述べる。そして、この集を編むにあたり、唐王朝の著名な詩人から最近の詩人の作品を通観したが、素晴らしい作品を集めることは困難を極めた。その採詩基準は「清詞麗句」であり、従来の詩人の名声や流派に惑わされずに選んだ（總其記得者，才子一百五十人，誦得者，名詩三百首）。選詩にあたっては、律の整っているものを採り、煩雑で徒に華やかなものは除いた（律者既採，繁者是除）という。古来より名人の作品といわれるものの中にもつまらないものもあるので、美しい作品を取り落とさないようにすべきではあるが、総てを載せる事は非常に難しい。その苦労は喩えれば、斧を取って山に伐りに行き、嘉木だけを求め、瓶を携えて海に赴いて、甘泉だけを汲み、風月煙花を同等にして、樝梨橘柚をそれぞれ是としたものであると表現している。そして最後に、韋荘は自ら編纂したこの詩集はかつて姚合が編纂し、精緻を極めた『極玄集』を超えるさらに玄なるものを選び抜いて『又玄集』と名付け、後世に伝えるために、「実をとり、華を捨て去り、ここに来者を待つ」と記した。これまでみてきたように『又玄集』の採詩基準は「清詞麗句」であり、さらに具体化すれば「詩律の整ったもの」であり、決して煩雑で徒に華やかさをもつものではなかったということである。この傾向の具体は選ばれたそれぞれの作品をつぶさに検討していかなければならないが、『又玄集』二〇〇余編が所謂律詩であることからも、編者韋荘がいかに当時の詩律（律句を構成する平仄式）に高い関心と価値を認めていたことが窺えるであろう。

六．杜甫「戲爲六絶句」における問題

「戲爲六絶句」は、上元二年（七六一）杜甫五十歳、成都での作とされる。六つの絶句で構成され、前代の詩人の評価と杜甫自身の詩についての考え方を述べた連作とされる。この連作は従来杜甫が詩論を述べたものとして広く理解されてきた。しかしながら詩題に冠する「戲」の字から、正面切った正論の詩論ではなく、戯題詩としてあくまで戯れとしての軽い気持ちの意味合いで作られたものとする説も存在する。吉川幸次郎（注10）は、『杜甫詩注』の中で、宋の張戒『歳寒堂詩話』下を引き、「これは庾信や初唐四傑など過去の詩人のために作ったのではなく、杜甫自身の詩についてあれこれケチをつける批判者がいるので、それに対して憤懣を発して作ったというのは、ある程度当たっていよう。」と、また、錢謙益『讀杜二箋』を引き、「ただし、正面からの反批判ではなく、あくまでも〈戯れ〉というスタンスを保っている。〈戯

れ」はまた、本心をカモフラージュするための自己韜晦の意味を帯びてもいる」と述べている。谷口真由実（注11）は、三十三首存在する杜甫の「戯題詩」を分析する中で、「戯」を冠する詩は、杜甫の詩の本質と深く関わり、杜甫の全体像を理解する上で疎かにできないものとし、「官定後戯贈」を取り上げて論じている。谷口は、杜甫にとって「戯」は、本音を吐露するための、自己の内面を追求するための「仮面」であり、一般に仮面を被ることの意味とは反対に、「仮面」を被ることが、虚飾をすべて剥ぎとって本然的な自分を問い直す営みであったと述べ、杜甫の「戯題詩」の大部分は、現実の世界や現状に、既成のすべての物事になずまず、新生面を切り開こうとする精神に貫かれていると指摘している。

「戯為六絶句」　杜甫

其一　**庾信**文章老更成，凌雲健筆意縱橫。
　　今人嗤點流傳賦，不覺前賢畏後生。
其二　**楊王**（一作王楊）**盧駱**當時體，輕薄為文哂未休。
　　爾曹身與名倶滅，不廢江河萬古流。
其三　縱使**盧王**操翰墨，劣于漢魏近**風騷**。
　　龍文虎脊皆君馭，歷塊過都見爾曹。
其四　才力應難誇（一作跨）**數公**，凡今誰是出群雄。
　　或看翡翠蘭苕上，未掣鯨魚碧海中。
其五　不薄今人愛古人，**清詞麗句**必為鄰。
　　竊攀屈宋宜方駕，恐與齊梁作後塵。
其六　未及前賢更勿疑，遞相祖述復先誰。
　　別裁**偽體**親**風雅**，轉益**多師是汝師**。（太字は論者）

第一首では庾信への賞賛、第二首と第三首では王勃、楊炯、盧照鄰、駱賓王ら、いわゆる初唐の四傑への高い評価と彼らを誹る同時代人への反駁。第四首では、同時代人の才能と庾信や四傑の才能を比較。そして、第五首と第六首では、杜甫自身の詩作についての考え方を述べている。

韋荘の採詩基準である「清詞麗句」を含む其五では、

不薄今人愛古人，今人を薄んぜず古人を愛せば、
清詞麗句必爲鄰。清詞麗句は必ず鄰を為さん。
竊攀屈宋宜方駕，竊かに屈宋を攀ぢ宜しく駕を方ぶべきも、
恐與齊梁作後塵。恐る齊梁の與に後塵と作らんことを。
（傍点論者）

と、近い時代の詩人も軽んぜず、古い時代の詩人の詩もしっかりと学び、今人、古人と問わず模範となる清詞麗句を近くにおいて吸収すべきであると歌っている。

また、其六では、

未及前賢更勿疑，未だ前賢に及ばざるも更に疑うこと勿れ，
遞相祖述復先誰。遞に相い祖述して復た誰をか先にせん。
別裁偽體親風雅，別に偽體を裁して風雅に親しみ，
轉益多師是汝師。轉た益すます多師なるは是れ汝が師なり。

と、自分の才能が前代の詩人たちに及ばなかったとしても、自分の才能に疑いをもってはいけない。前代の詩人の優れた作品をお手本として、『詩経』の精神に背く詩を退けていけば、模範とすべき詩人、作品が多くなり、自分にとっての師となるのだと歌わ

れている。ここには、時流の党派に依らない杜甫独自の詩論の一端を垣間見ることができる。

この「戯爲六絶句」が、杜甫自身の詩論をどれだけ真っ向から表出したものであるか否かということは、今一度詳細な検討が必要な問題だが、風騒（『詩経』「国風」や『楚辞』「離騒」）から今に至るまで、古今を問わず広く詩を学び、その模範となる「清詞麗句」は、いわば杜甫が目標とした作詩基準でもあったといえよう。韋莊が『又玄集』の序文に掲げた採詩基準はまさに、この杜甫の作詩基準を踏まえているといえよう。それを裏づけるものとして、韋莊は、詩才に恵まれながらも様々な事情で科挙に及第することなく終わった先人達に、進士及第の追賜を願い出た上奏文「乞追賜李賀皇甫松等進士及第奏」（注12）を作成し、その中で、「皆有奇才**麗句清詞**偏在詞人之口銜冤抱恨竟爲冥路之塵」（太字論者）と、彼らの詩を「麗句清詞」と高く評価していることが挙げられる。

以上述べてきたことは、実は、官吏登用の根幹に儒学が位置づけられる体制下において、晩年の杜甫が政治参与の手段としての「文学」から脱却し、自らの存在を肯定する表現手段として「文学」を再認識し、その様々な可能性を追究しつつ詩作を続けたことと密接な関係があると考えられる。詩語はその文字自体が意味することを表現するものだけでなく、それが組み合わされ発声されるときの音声により一層人の心情に訴えかけるものとなることを杜甫は深く認識していた。そして、その根幹となる詩律の構成により奏でられる韻律や響きを追究することは、ときに律（正格）を破る（破格）ことも杜甫に要求した。こうして作り出された自らの詩を残すことは、詩家として「文学」の可能性・評価を後世に問うことでもあったと考えられる。杜甫の死後、百年余を経て杜詩が初めて採録された『又玄集』という詞華集における詩律が、このような杜甫の詩律への挑戦的な営みと果たしてどのような関係になるのか、今後さらに研究を深めたい。

七.『又玄集』における詩僧の詩律について

『又玄集』の特徴のひとつに詩僧の詩の採録がある。『又玄集』巻下には、十一人の詩僧（無可、清江、棲白、法振、法照、護國、太易、靈一、惟審、皎然、滄浩）の十四首（五言詩十首、七言詩四首）が採録されている（注13）。以下、本文、平仄（平は○仄は●、△は平仄両方もつもの、◎は押韻）、現代中国語拼音を掲げてその具体を示す。今回の底本は、『唐人選唐詩新編（増訂本）』（傅璇琮・陳尚君・徐俊編、中華書局、二〇一四）を使用した。

僧無可　sēng wú kě

金州夏晩陪姚員外游　jīn zhōu xià wǎn péi yáo yuán wài yóu

柳暗青波漲，●●○○△　liǔ àn qīng bō zhǎng，
衝萍復漱苔。○○●●◎　chōng píng fù shù tái。
張筵白鳥下，△○●●●　zhāng yán bái niǎo xià，
掃岸使君來。●●●○◎　saǒ àn shǐ jūn lái。
洲島秋應没，○●○△●　zhōu daǒ qiū yīng méi，
荷花晩盡開。△○●●◎　hé huā wǎn jìn kāi。
高城吹角絶，○○△●●　gaō chéng chuī jiǎo jué，

騶馭尚徘徊。 ○●△○◎ zōu yù shàng pái huái。

◆五言律詩

◆押韻　苔・來・開・徊（上平声・十灰）

夏日送田中丞赴蔡州　xià rì sòng tián zhōng chéng fù cài zhōu

出守汝南城， ●●●○◎ chū shǒu rǔ nán chéng，
應多戀闕情。 △○●●◎ yìng duō liàn quē qíng。
地遥人久望， ●○○●△ dì yaó rén jiǔ wàng，
風起旆初行。 △●●○◎ fēng qǐ pèi chū xíng。
楚廟繁蟬斷， ●●○○● chǔ miào fán chán duàn，
淮田細雨生。 ○○●●◎ huái tián xì yǔ shēng。
賞心知有處， ●○○●● shǎng xīn zhī yǒu chǔ，
蔣宅古松平。 △●●○◎ jiǎng zhái gǔ sōng píng。

◆五言律詩

◆押韻　城・情・行・生・平（下平声・八庚）

僧清江　sēng qīng jiāng

贈淮西賈兵馬使　zèng huái xī jiǎ bīng mǎ shǐ

破虜功成百戰場， ●●○○●●◎ pò lǔ gōng chéng bǎi zhàn chǎng，
天書親拜漢中郎。 ○○△●●△◎ tiān shū qīn bài hàn zhōng láng。
映門旌旆春風起， ●○○●○△● yìng mén jīng pèi chūn fēng qǐ，
對客絃歌白日長。 ●●△○●●◎ duì kè xián gē bái rì cháng。
堦下鬬鷄花乍拆， ○●●○○●● jiē xià dòu jī huā zhà chāi，
營南試馬柳初黄。 ○○●●●○◎ yíng nán shì mǎ liǔ chū huáng。
猶來楚蜀多同調， △△●●○○△ yóu lái chǔ shǔ duō tóng diào，
感激逢君共異鄉。 ●●○○△●◎ gǎn jī féng jūn gòng yì xiāng。

◆七言律詩

◆押韻　場・郎・長・黄・鄉（下平声・七陽）

長安臥病　cháng ān wò bìng

身世足堪悲， ○△●○◎ shēn shì zú kān bēi，
空房臥病時。 △○●●◎ kōng fáng wò bìng shí。
卷簾花雨滴， ●○○●● juàn lián huā yǔ dī，
掃室竹陰移。 ●●●○◎ saǒ shì zhú yīn yí。
已覺生如夢， ●●△△△ yǐ jué shēng rú mèng，
那嗟壽不知。 △○●△◎ nà jiē shòu bù zhī。
未能通法性， ●△○●● wèi néng tōng fǎ xìng，
詎可見流離。 ●●●○◎ jù kě jiàn liú lí。

◆五言律詩

◆押韻　悲・時・移・知・離（上平声・四支）

僧棲白　sēng qī bái

哭劉得仁　kū liú de rén

爲愛詩名吟到此， △●○○△●● wèi ài shī míng yín daò cǐ，
風魂雪魄去難招。 △○●●●△◎ fēng hún xuě pò qù nán zhaō。
直教桂子落墳上， ●△●●●△● zhí jiào guì zǐ luò fén shàng，
生得一枝冤始銷。 △●●○○●◎ shēng de yī zhī yuān shǐ xiāo。

◆七言絶句

◆押韻　招・銷（下平声・二蕭）

八月十五夜月　bā yuè shí wǔ yè yuè

尋常三五夜，○○△●●　xún cháng sān wǔ yè，
豈是不嬋娟。●●△○◎　qǐ shì bù chán juān。
及到中秋半，●●△○●　jí daò zhōng qiū bàn，
還勝別夜圓。○△●●◎　huán shèng bié yè yuán。
清光凝有露，○△△●●　qīng guāng níng yǒu lù，
皎色爽無煙。●●●○◎　jiǎo sè shuǎng wú yān。
自古人皆望，●●○○△　zì gǔ rén jiē wàng，
年來復一年。○△●●◎　nián lái fù yī nián。

◆五言律詩
◆押韻　娟・圓・煙・年（下平声・一先）

僧法振　sēng fǎ zhèn

送韓侍御自使幕巡海北　sòng hán shì yù zì shǐ mù xún hǎi běi

微雨空山夜洗兵，○●△○●●◎　wéi yǔ kōng shān yè xǐ bīng，
繡衣遥拂海風清。●△○●●△◎　xiù yī yaó fú hǎi fēng qīng。
幕中運策心應苦，●△●●○△●　mù zhōng yùn cè xīn yìng kǔ，
馬上題詩卷欲成。●●△○●●◎　mǎ shàng tí shī juàn yù chéng。
離亭不惜花源醉，△○△●○○●　lí tíng bù xí huā yuán zuì，
古道猶看蔓草生。●●△△△●◎　gǔ daò yóu kàn màn caǒ shēng。
因説元戎能破敵，○●○○△●●　yīn shuō yuán róng néng pò dí，
高歌一曲隴關情。○○●●●○◎　gaō gē yī qū lǒng guān qíng。

◆七言律詩
◆押韻　兵・清・成・生・情（下平声・八庚）

僧法照　sēng fǎ zhaò

寄錢郎中　jì qián láng zhōng

閉門深樹裏，●○△●●　bì mén shēn shù lǐ，
閒足鳥來過。○●●△●　xián zú niǎo lái guò。
駟馬不爲貴，●●△△●　sì mǎ bù wèi guì，
一僧誰奈何。●○○●◎　yī sēng shéi nài hé。
藥苗家自有，●○○●●　yaò miáo jiā zì yǒu，
香飯乞時多。○●●○◎　xiāng fàn qǐ shí duō。
寄語嬋娟客，●●○○●　jì yǔ chán juān kè，
將心向薜蘿。△○●●◎　jiāng xīn xiàng bì luó。

◆五言律詩
◆押韻　過・何・多・蘿（下平声・五歌）

僧護國　sēng hù guó

許州趙使君孩子晬日　xǔ zhōu zhaò shǐ jūn hái zǐ zuì rì

毛骨貴天生，△●●○◎　maó gǔ guì tiān shēng，
肌膚片玉明。○○●●◎　jī fū piàn yù míng。
見人空解笑，●○△●●　jiàn rén kōng jiě xiào，
弄物不知名。●●△○◎　nòng wù bù zhī míng。
國器嗟猶少，●●○△●　guó qì jiē yóu shaǒ，
門風望益清。○△△●◎　mén fēng wàng yì qīng。
抱來芳樹下，●△○●●　baò lái fāng shù xià，
時引鳳雛聲。○●●○◎　shí yǐn fèng chú shēng。

◆五言律詩
◆押韻　生・明・名・清・聲（下平声・八庚）

僧太易　sēng tài yì

　贈司空拾遺　zèng sī kōng shí yí

侍臣何事辭雲陛，●○△●○○●　shì chén hé shì cí yún bì，
江上微吟見雪花，○●○△●●◎　jiāng shàng wéi yín jiàn xuě huā，
望闕未承丹鳳詔，△●●○○●●　wàng quē wèi chéng dān fèng zhào，
閉門空對楚人家。●○△●●○◎　bì mén kōng duì chǔ rén jiā。
陳琳草奏才還在，△○●●○○●　chén lín cǎo zòu cái huán zài，
王粲登樓興不賒。△●○○△△◎　wáng càn dēng lóu xìng bù shē。
高館更容塵外客，○●△○○●●　gāo guǎn gèng róng chén wài kè，
仍弱歸路待瑶華。○●○●●○◎　réng ruò guī lù dài yaó huá。

◆七言律詩
◆押韻　花・家・賒・華（下平声・六麻）

僧靈一　sēng líng yī

　宿天柱觀　sù tiān zhù guān

石室初投宿，●●○○●　shí shì chū tóu sù，
仙翁喜暫容。○○●●◎　xiān wēng xǐ zàn róng。
花源隔水見，○○●●●　huā yuán gé shuǐ jiàn，
洞府過山逢。△●△○◎　dòng fǔ guò shān féng。
泉湧堦前地，○●○○●　quán yǒng jiē qián dì，
雲生戶外峰。○△●●◎　yún shēng hù wài fēng。
中宵自人定，△○●○●　zhōng xiāo zì rén dìng，
不是欲降龍。△●●△◎　bù shì yù jiàng lóng。

◆五言律詩
◆押韻　容・逢・峰・龍（上平声・二冬）

僧惟審　sēng wéi shěn

　賦得聞曉鶯啼　fù de wén xiǎo yīng tí

卷簾清夢後，●○○△●　juàn lián qīng mèng hòu，
芳樹引流鶯。○●●○◎　fāng shù yǐn liú yīng。
隔葉傳春意，●●△○●　gé yè chuán chūn yì，
穿花送曉聲。△○●●◎　chuān huā sòng xiǎo shēng。
未調雲路翼，●△○●●　wèi diào yún lù yì，
空負桂林情。△●●○◎　kōng fù guì lín qíng。
莫盡關關興，●●○○△　mò jìn guān guān xìng，
羈愁正厭生。○○△●◎　jī chóu zhèng yàn shēng。

◆五言律詩
◆押韻　鶯・聲・情・生（下平声・八庚）

僧皎然　sēng jiǎo rán

　酬崔侍御見贈　chóu cuī shì yù jiàn zèng

買得東山後，●●○○●　mǎi de dōng shān hòu，
逢君小隱時。○○●●◎　féng jūn xiǎo yǐn shí。
五湖游不厭，●○○△●　wǔ hú yóu bù yàn，
柏樹跡如遺。●●●△◎　bǎi shù jī rú yí。
儒服何妨道，○●△△●　rú fú hé fáng daò，
禪心不廢時。△○△●◎　chán xīn bù fèi shí。
一從居士説，●△○●●　yī cóng jū shì shuō，
長破小乘疑。△●●△◎　cháng pò xiǎo chéng yí。

◆五言律詩
◆押韻　時・遺・時・疑（上平声・四支）

僧滄浩　sēng cāng hào

留別嘉興知己〔一〕　liú bié jiā xìng zhī jǐ〔yī〕

一坐東林寺，●●○○●　yī zuò dōng lín sì，

從来未下山。△△●●◎　cóng lái wèi xià shān。

不因尋長者，△○○△●　bù yīn xún cháng zhě，

無事到人間。○●●○◎　wú shì dào rén jiān。

宿雨愁爲客，●●○△●　sù yǔ chóu wèi kè，

寒禽散未還。○○●●◎　hán qín sǎn wèi huán。

空懐舊山月，△○●○●　kōng huái jiù shān yuè，

童子誦經閒。○●●△◎　tóng zǐ sòng jīng xián。

◆五言律詩

◆押韻　山・間・還・閒（上平声一五・刪）

以上、『又玄集』採録の詩僧の作品を見てきたが、その詩律においては、近体詩として極めて整ったものであるといえよう。また、詩の内容においても派手さのない極めて抑制されたものといえる。韋莊は、詩僧の詩の採詩にあたり、採詩基準「清詞麗句」として序文に示された「律者既採，繁者是除」の典型を為すものを選んだといえるだろう。引き続き、他の詩人の作品を吟味していく。

【注】

（注1）『又玄集』一巻。唐の韋莊の撰。序文によれば「光化三年（九〇〇年）」の成立とある。傅璇琮らの編による『唐人選唐詩新編〈増訂本〉』（二〇一四）の校訂では、詩人総数一四六人、詩総数二九九首とある。上巻に杜甫、中巻に杜牧、下巻に馬戴をそれぞれ圧巻としている。唐人選唐詩の中では唯一杜甫の詩が採録された詩集であり、集中に当時の杜甫の事蹟消息を歌った任華の「雜言杜拾遺」がある。また、登第することなく不遇に終わった詩人や僧侶、女性（女郎・女道士）など幅広い層の作品が採られている。詩体は古詩（五古・七古）、絶句（五絶・七絶）、律詩（五律、七律、排律）、雑言があるが、律詩が全体の約九割を占めている。

（注2）「唐人選唐詩」は、唐代の人の手になる唐代の詩人の詩の撰集。傅璇琮らの編による『唐人選唐詩新編〈増訂本〉』（二〇一四）には、『翰林學士集』（佚名編）、『珠英集』（崔融編）、『捜玉小集』（佚名編）、『丹陽集』（殷璠編）、『河岳英靈集』（殷璠編）、『國秀集』（芮挺章編）、『篋中集』（元結編）、『玉臺後集』（李康成編）、『中興間氣集』（髙仲武編）、『御覽詩』（令狐楚編）、『元和三舎人集』（佚名編）、『極玄集』（姚合編）、『竇氏聯珠集』（褚藏言編）、『又玄集』（韋莊編）、『瑶池新詠集』（蔡省風編）、『才調集』（韋縠編）の十六の詩集が採録されている。

（注3）『又玄集』は、夏承壽の『唐宋詞人年譜』（上海古典文学出版社　一九五五）に対する清水茂の書評「書評　夏承壽「唐宋詞人年譜」」（中國文學報　京都大学中國文學研究室　一九五六）の中で、和刻本『又玄集』（江戸昌平坂学問所版）の存在を紹介するまで、中国本土では散佚したと思われていた。

（注4）豊田穣「篋中集に録せられたる詩人に就いて」（斯文、一八編八号、一九三八）

（注5）川北泰彦「盛唐詩壇における杜甫の位置一」（奈良教育大学国文一、一九七七）、川北泰彦「盛唐詩壇における杜甫の位置二」（奈良教育大学国文二、一九七九）

（注6）伊藤正文「杜甫と元結・『篋中集』の詩人たち」（中國文學報一七、京都大学中國語學中國文學学研究室内中國文學會、一九六二）、川北泰彦「元結に於ける文学的軌跡」（目加田博士古稀記念中国文学論集、龍溪書舍、一九七四）

（注7）『唐人選唐詩新編（増訂本）』（傅璇琮・陳尚君・徐俊編、中華書局、二〇一四）を参照。

（注8）韋莊は温庭筠とともに晩唐五代の重要な詞人である。五代の詞集『花間集』（張崇祚編、九四〇）に採録された花間派詞人として著名であった。

（注9）王力『漢語詩律学』（新知識出版社、一九五八）、松尾善弘『唐詩の解釈と鑑賞&平仄式と対句法』（近代文藝社、一九九三）、古川末喜『初唐の文學思想と韻律論』（知泉書館、二〇〇三）、丸井憲『唐詩韻律論―拗體律詩の系譜』（研文出版、二〇一三）

（注10）吉川幸次郎『杜甫詩注』巻九（興膳宏編、岩波書店、二〇一五）

（注11）谷口真由実「杜甫の「戯題詩」について―「戯」の意識を探る―」（お茶の水女子大学中国文学報第五号、一九八六）

（注12）広瀬智「韋莊「乞追賜李賀皇甫松等進士及第奏―『又玄集』編纂意識論補説―」（奈良教育大学国文二五、二〇〇二）

（注13）『唐人選唐詩新編（増訂本）』（傅璇琮・陳尚君・徐俊編、中華書局、二〇一四）の八六四頁〜八六八頁を参照。